

# 地質ニュース



NO. 2 1953

地質調査所

## 地下資源というもの

鉱床部長 佐藤源郎

日本の主な地下資源の中で、自給自足できるものまたは輸出の余裕あるものは硫化鉄と硫黄と石灰石で、逆に海外依存度の最も高いものが鉄鉱である。

硫化鉄についていえば、日本は世界有数の産出国で、スペインに次いで世界第二位を占めていたが、1948年以降は世界一となり、1952年には240万tを出して世界最高記録を作った。

硫黄は1937年に24万tを出したが、昨年は18万tで、世界第三位を占め、二位のイタリアに肉迫している。しかし日本の精製硫黄の生産価格は米の3.5倍、伊の1.5倍の高値であるから、世界市場に威張つて持出すわけにはいかない。では、どうしてこんなに高いのか？ 最大の原因は鉱床の賦存状況が著しく異なることによるので、この点いかんともし難いが、掘出された鉱石の9割までが今もつて原始的で非能率的な焼取法によつて製錬されているのは、資源の浪費であり、さらに、鉱害をもたらして世人から忌避される点、誠に棄ておけぬ問題である。

この故に遅まきながら日本の硫黄鉄石をその鉱床状況から再検討し、これに適應した合理的・能率的な製錬方式を定める審議が進行中で、近く結論が出るはずである。

石灰石は無盡蔵といわれるほど豊富である。しかし製鉄・カーバイト・セメント、あるいはビニロン原料用として要求される規格に及第する石灰石を、

安く能率的に掘つてゆこうとするとけつして樂觀を許さない。

単に石灰石が豊富にあるからということだけで、精しい地質調査もやらずに建てられた工場が動き始めて、思わぬ地質条件で採掘困難となり、あるいは品質がガタ落ちしたりしてあわてる例は少くない。

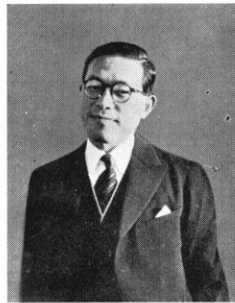
工場立地に油断は禁物である。また無計画に乱掘すれば豊富な資源も早く盡きてしまう。

さて最後に不足資源の王者鉄鉱を考えよう。日本の鉄鉱資源が貧弱であることは否定できないが、われわれは必ずしも将来を全く悲観してはいない。第一に稼行品位を少し下げればまだまだある。砂鉄の分布は不規則ながらも量は貧弱でもない。

また東北地方の奥地や北海道は探査の点からいえば処女地帯も同様であり、

千歳やイトムカなど極めて若い鉱山で、これにつづくものが期待されよう。

なおまた、近い将来硫化鉄として磁鉄鉱を使いこなすようになれば、その残滓が高品位の鉄鉱石になるから、年産200万t以上の鉄山が生まれ出たことになり、さらに増産もできよう。つまり貧鉄処理を中心とした関連技術の総合力を発揮すれば、かつて喧傳された“持てる國日本”の掛声もあながち空念佛にはおわらぬと言いたいところか。



佐藤鉱床部長